

図書館だより

目次	
資料保存の在り方を問う 日本女子大学叢書の紹介 『女子理学教育をリードした女性科学者たち』	— 島崎 恒藏 1
『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクトの研究』	— 蟻川 芳子 2
私の研究における2つの転機	— 江田すみれ 3
『日本女子大学図書館友の会 記録—48年の歩み—』	— 高橋 行徳 4
図書館友の会が遺されたもの	— 飯塚 美子 5
『日本女子大学学術情報リポジトリ』の公開に向けて	— 堀 英理子 6
平成25年度夏期スクーリング開館について	— 濱口 都紀 7
	— 中澤 恵子 8



中庭越しにのぞむ西生田図書館

資料保存の在り方を問う

島崎 恒藏

歴史・文化的資料は、多様な変遷を経て固有に蓄積されてきたものであり、また私たちが生きてきた証でもある。伝統工芸やその技術の伝承なども同様の側面を持っている。このような価値ある資料・技術などは、着実に後世に伝えていかなければならないものであることは、異論の余地はないであろう。2年半前の東日本大震災を始めとする大規模災害は、わが国の資料保存の在り方を私たちに意識させる機会にもなった。自然現象に起因する大規模災害は、不可抗力的側面が大きいと言えるものであるが、最近ではそれとは全く異なった点から、資料保存について考えさせられることがある。

私の関連分野で恐縮ではあるが、数年前に桐生の織物メーカーを訪問した際に、膨大なテキスタイル見本に接する機会があった。その時に、このような文化的側面を持つ資料が、将来どのような命運をたどるのか、危惧の念を抱いた記憶がある。ところが近頃、身近なところでこの種の危惧を想起させられる場面があった。八王子は絹織物・デザインの伝統を有した地域であるが、この地のある織物メーカーが経営破綻した。この会社は、生産設備は別にしても、資料室には七千点に上るテキスタイル見本、約二百ブランドのオリジナル素材で数万点分のデータを保存したスクラップファイルが、総計で六百冊以上あったという。しかし幸いなことに、この会社の場合には東京の服装系大学の附置研究所として救済されたが、民間会社の経営破綻では貴重資料が保存・救済されるのは、極めて希有であろう。事実、京都・西陣地域などでも、経営破綻・廃業等により伝統技術やデザインが、ずいぶんと離散してしまったとの話を聞く。よく調べてみると、民間会社等が所有する図書館、あるいは資料室などに所蔵する図書・資料の中には、国立国会図書館にも所蔵されていないような貴重なものも少なからず存在するようだ。

わが国では長期保存文書（資料）に関しては、国立公文書館が大きな役割を果たしている。しかし同館も永久保存資料が急激に増加し、近いうちに収容に支障を生じ始めるとの状態に瀕しているようだ。また資料保存の手段としては、専ら電子化が一般的であり、かつ理想的と考えられがちだが、電子媒体による長期保存は未知の分野とも言え、検討すべき重要な問題を内在させている。今や種々の形で存在する資料の保存の在り方やシステム作りを根本的に考え直さなければならない時期にきていると思う。

(図書館長・被服学科教授)

蟻川芳子 [監修] 日本女子大学理学教育研究会 [編]

『女子理学教育をリードした女性科学者たち

—黎明期・明治期後半からの軌跡—』(日本女子大学叢書13)

蟻川 芳子

理系女子の育成が奨励される今日、本学では理学教育が110余年前の創立当初から行われ、そこから育った女性教員の手で理学教育が綿々に行われてきた。この事実を歴史的に検証し後世に残したいとの思いで、総合研究所の研究課題として調査した成果を、この度日本女子大学叢書として出版することができた。

「女子に学問は不要」、さらに「科学は害になる」とまで言われていた時代に、創立者成瀬仁蔵は19世紀末に見聞した米国における自然科学の教育を、1901年創立時から家政学部の教育の柱の一つとして位置づけ、さらに1906年には理学を主として学ぶ教育学部を設立した。ここには化学の長井長義、動物学の渡瀬庄三郎、物理学の後藤牧太をはじめ、各分野一流の学者が非常勤教授として教育および研究の指導にあたった。このような教育環境のなかから、女性科学者が育っていった。明治後半から大正期にかけて、誠に珍しい例である。

本書は3部構成で、第1部は「女子理学教育の歩み」と題して、日本および本学における女子理学教育の歴史的背景を浮き彫りにし、第2部は「日本女子大学校出身の女性科学者とその足跡」として、本学理学教育の基礎を築いた長井長義と初期の卒業生で女性科学者のパイオニア丹下ウメ、大橋 廣、鈴木ひでるを紹介、さらにその教え子で二世代ともいべき奥田富子、道 喜美代、高橋憲子、辻 キヨを紹介した。第3部は「女性科学者の実像に迫る」で、先達自身の随想および『成瀬記念館』誌から付随的な記事を取り出して掲載した。先達たちの当時の思いや教え子たちの思い出が、ひしひしと伝わってくる章である。執筆は蟻川芳子、今泉幸子、江澤郁子、大隅正子、小川京子、金子堯子、木本万理、五関正江、高橋雅江、中村輝子、宮崎あかね、山田妙子が分担して行ったが、みな二世代の先達から教えを受けた三世代の教員であり、それぞれの分野で四世代の教育と研究に携わっている。

家政学部一回生の丹下ウメは化学を専門とし、女性として初めて帝国大学に入った一人として知られる。ジョンズ・ホプキンス大学でPh.D.を、さらに本学教授として勤める傍ら農学博士の学位を取得した女性科学者のパイオニアである。英文学部3回生、教育学部6回生の大橋 廣はシカゴ大学で学位を取得したが、若くして大学運営の主力メンバーとして抜擢され、第5代学長となった。教育学部7回生の鈴木ひでるは女性薬学博士第一号となったが、その研究に賭ける情熱は、香雪化学館を不夜城と言わせたという伝説がある。これら初期の卒業生を指導したのは、長井長義、渡瀬庄三郎、大澤謙二らであるが、丹下、大橋、鈴木はいずれも母校の教授として、後輩の教育および大学運営に力を注いだ。

その教え子に奥田富子、道 喜美代、高橋憲子、辻 キヨがいる。奥田は教育学部を卒業後母校の物理学教室に残り、“物理教育および家庭婦人への科学的知識の普及”に努力、初期のテレビ放送にも出演している。農学博士、農芸化学者としての道は、日本で最初の家政学大学院の設置に当時の学長上代タノを支え、自身も第8代学長として大学紛争後の大学を立て直した。高橋憲子は一般教育課程の「生理学」の授業、および学生部長として大学紛争時に学生の擁護に奮闘したことは有名であるが、植物生理学分野で理学博士の学位を取得した科学者である。辻 キヨは丹下ウメ、鈴木ひでるの下で本学の化学教育を支え、のちに化学教室の中心人物として理学部設置に情熱を燃やした。薬学博士として教育・研究に真摯に立ち向かう傍ら、婦人国際平和自由連盟日本支部会長として、平和活動にも力を尽した。

奥田、道、高橋、辻はそれぞれ戦後の新制日本女子大学で、理学教育をリードしてきた。理学教育を明治末期から女性の手で行ってきた例は、教員養成を目的とする女子高等師範学校を除いて、本学以外には見当たらない。現在本学が私立女子大学で理学部を持つ唯一の大学であるのは、100年に及ぶ理学教育の賜物である。

(第12代学長・名誉教授)

江田すみれ著

『「ている」「ていた」「ていない」のアスペクトの研究

—異なるジャンルのテキストにおける使用状況とその用法— (日本女子大学叢書14)

江田 (ごうだ) すみれ

本書は、従来「ている」にまとめて論じられてきた「ている」「ていた」「ていない」を別個に扱い、それぞれのもつアスペクト的な特色、テキスト中での機能を検討したものである。

本書は「ている」「ていた」「ていない」の会話と新書の中での用法をとりあげた。これは、二つの理由による。まず、これらのテキストは大学で学ぶ学習者にとってその使い方を知っておく必要があるものであり、そして、会話と新書はテキストの基本テンスが異なっていることから、アスペクトも違った使われ方をしている部分があるであろうと考えたためである。

資料としては、社会人の職場での会話、『CASTEL/J』の中の新書を文字数換算で等量用意し、「ている」「ていた」「ていない」の用例を抽出しそれらを分析することによって考察を進めた。

はじめにテキストの基本的なテンスを確認した。会話は話者・聞き手が存在し、話し手のいる現在を基準時とするものであり、基本的に「る」は未来・現在、「た」は過去を表す。これに対し、小説は基本テンスが「た」であるが、小説の「た」は過去ではなく、物語をタクシ的に語るものである(工藤1995)。そして、新書では「る」が基本的なテンスである。つまり、過去の事例や時系列的な出来事は「た」で表現されるが、それらはあくまでも例であり、そのような事例から導き出される一般化された考察、社会現象・自然現象、事物の属性などは「る」で表わされるのである。

本書は「ている」の用法を「運動短期」「運動長期」「結果状態」「繰り返し」「効力持続」「性状」と6分類した。「運動長期」に注目することによって、いくつかの発見があった。

会話の「ている」については「運動長期」と「効力持続」について述べた。「運動短期」が日常的な動作の継続を表現するのにに対し、「運動長期」は仕事場面での長期的な活動を表し、継続の時間の長短によって表現する内容が異なる。会話の中での「効力持続」は過去の出来事を現在と関係させるのが基本的な意味だが、文脈によっては配慮を示すムード的な用いられ方も可能である。

新書での「運動長期」はかなり長期的な社会現象や自然現象を表すこともできる。新書での「効力持続」「運動長期」は話題提供、結論を示す機能を持つ。これは「効力持続」が引用を表現すること、「統括主題」のある文脈で用いられることによる。会話と新書では「効力持続」の機能に異なった部分があると言える。

「ていた」については、はじめに「た」と動作継続の「ていた」の使い分けについて考察した。過去の継続的な事態を「た」で表現するか「ていた」を使うかは学習者にとっては難しいことのようなのである。事態の継続の「ていた」は、動詞の表わす事柄の時間と、文で表現されている時間幅がある程度あっている必要がある。また、過去の基準となる時、開始や終了の時点、持続の期間が表現されている場合は「ていた」が許容されやすい。そして、「ていた」には「発見」の意味があるため、一定の事態に気づいたという文脈では許容度が増す。

「完了」の「ていた」が成立するには①基準となる「た」節に焦点があること、②「た」節と「ていた」節の間に状況の変化があることが必要である。「完了」の「ていた」の場合も「発見」の意味が含まれると認められやすい。

「ていない」については、過去の否定は「なかった」、完了の否定は「てない」という考え方があ(寺村1984)が、本書は、過去の事態であっても現在と何らかの関係を持つ場合は「ていない」によって否定が示されることを述べた。「なかった」は現在と切り離された過去、主節より以前の事態など、必然的に「なかった」になる場合に用いられる。

本書は以上のような研究結果を日本語教育の場に生かしていただきたいと願う。「ている」「ていた」「ていない」について日本語教育に提言したいことは以下の3点である。(1)「ている」「ていた」「ていない」の教育を中級においてもすること、(2)「ている」「ていた」「ていない」のそれぞれの特色を把握して教育すること、(3)テキストによる文法項目のふるまいの違いを考慮すること、である。「ている」と「ていた」の関係は、「ている」が理解できれば「ていた」は自動的に使用可能になるというものではない部分があるものである。(日本文学科教授)

2013年3月発行 くらしお出版 *目白・西生田 請求記号815.5-God

私の研究における2つの転機

高橋 行徳

停年まで残り僅かな年齢になると、大学での様々な出来事が懐かしさと共に思い出される。しかし研究者としての自分を振り返ると、後悔の念にかられてしまう。だが惑いの中で、もがき苦しんだ自分が、またいとおしくもある。恥をしのいで、私の研究について若干触れさせていただきたい。振り返ってみると、研究の上で3つの大きな転機があった。そのうちの3番目の転機は「シナリオ論」になるが、これは現在進行中であり、スペースの都合もあるのでここでは省かせていただく。

1982年に日本女子大学専任講師として迎えられたとき、私はこの機会に腰を据え、ドイツ文学の専門家として認められる論文を発表したいと考えた。日本ゲーテ協会が懸賞論文を募集していたので、それに応募することにした。執筆要件は、ゲーテをテーマにすること、および400字詰め原稿用紙で100枚以上であった。

しかし当時の私は現代文学が専門だったので、ゲーテは『若きヴェルターの悩み』など数冊しか読んだことがなかった。そこで研究対象となる『タウリスのイフィゲーニエ』を中心に、ゲーテの戯曲を原書で読む一方、全体像をつかむため、彼の訳書をすべて読むことにした。幸いなことに、女子大の図書館には人文書院の10巻本のみならず、戦前に刊行された大村書店の19巻本もそろっており、随分と助けられた。

準備と執筆に3年近くかかり、頁数は150枚前後だったと思う。内容は受容理論を用いた作品分析で、当時としてはかなり斬新な論文であった。その新しい手法ゆえに、ゲーテ一筋でこられた年配の研究者からは批判も浴びた。けれども従来のイフィゲーニエ像に変更を迫った点を高く評価すべきだという意見もあり、結局「日本ゲーテ協会会長賞」を受賞することになった。この賞のおかげで、目標を達成した喜びと同時に、研究者としての自信をも持つことができた。

受賞後ゲーテ研究に専念しておれば、私の進路は順風満帆とはいかないまでも、かなり順調に開けていたように思う。しかし私の天邪鬼が方向を変えてしまった。ゲーテは確かに途方もないほど懐が深く、私の一生に指針を与え続ける先生である。だがそこに安住してしまったら、現代に生きる私はどんな存在意義を持ちうるのであろうか。もっとアクチュアルな問題を有し、時には危険を孕んだ作家と取り組むべきだと考え、私は研究対象をカフカに変更した。

カフカ文学の難しさは、ヨーロッパ思想における二大潮流、ギリシア思想とヘブライ思想が混在していることである。前者の合理的な考えには馴染みがあったが、不条理をも包含する後者の考えにはかなり手こずった。大学の図書館には、法政大学出版局のユニベルシタス叢書がすべてそろっている。そのうちのショーレム、ブーバー、アドルノ、ベンヤミン等の著書は、私がユダヤ的思考の概略をつかむのに大いに役立った。

私はカフカ作品のうち、特に『判決』と『変身』を中心に研究した。その理由は、著者の出自の問題と当時の社会問題とが作品の中で巧みに形象化されていたからである。カフカに関連した書籍は、毎年かなりの数が刊行されている。そのうちの目ぼしい研究書を、内外を問わず図書館で購入していただいた。私はそれらの書籍を参照しながら、カフカのテキストを表層ではなく、深層部へと掘り下げて解釈することを自分に課した。そのためかなりの労力と時間をかけざるを得なかった。2003年に出版した『開いた形式としてのカフカ文学』は496頁にも及び、執筆期間は優に10年を超えていた。

次に私は『審判』に着手し、1/3程度書き上げた。だがその頃から、カフカ研究の趨勢は作品解釈ではなく、瑣末な異同にこだわる「文献学」へ移行していた。カフカ研究への未練はあったが、私はそこで培った「深読み」の手法を用いて、思い切って異なる分野「シナリオ論」へ飛び込むことにした。この3番目の転機については、また別の折にお話ししたい。

(文化学科教授)

『日本女子大学図書館友の会 記録 —48年の歩み—』について

飯塚 美子

1965年6月23日、日本女子大学第6代学長・上代タノ先生の提唱により設立された「日本女子大学図書館友の会」は、48年を経た本年3月末日を以て活動を終結、会を閉じるに至った。この自主団体として48年の長きに亙り営まれた活動の記録を纏めたものが本書である。

図書館友の会では設立の翌年から定期的に機関誌『会報』が発行され会員への連絡、報告、更に啓発的役割を果たしていた。他には講演会・講座・研修会等の手引き、解説、抄録等も作成されたが、総括的なものは残されていなかった。思いがけず筆者が事務局の一員として会の運営に携わったのは僅か15年ほどでしかなかったが、事務室に通うに従って創設者上代タノ先生、その片腕として会を育て上げた前常任理事北野美枝子氏、そして多くの協力者の方々の並々ならぬ手腕と努力の実績について次第に認識を深め、心から畏敬の念が沸き上がっていった。

昨年4月最終年度を迎えるにあたり、このまま無為に会を消滅してしまうことに心中ためらいを覚え、事務局スタッフと話し合いの結果、改めて図書館友の会の足跡を振り返り、活動の全記録を纏め残すことを決定した。直ちに役員会の賛同を得てこの企画に着手した時はすでに初夏であった。

資料としては上記の他に業務日誌、担当別に引き継がれてきた手書きの記録ノート、文書類である。試行錯誤を重ねつつ作業が進められていったが、このまま記録の羅列のみの編集では不完全であることに気付き、当初から望んでいたことでもあったが、長年友の会と共に歩み大きな支えを頂いてきた役員の名誉教授に本書の内容充実のため寄稿をお願いした。巻頭に掲げた3篇である。

中寫邦先生は成瀬仁蔵の図書館構想、その志を継いで発展せしめた上代タノ、図書館友の会設立と上代タノ平和文庫の成立・継承の精神についてご執筆くださり、**出淵敬子先生**は上代タノ平和文庫の運営と蔵書内容の解説、婦人国際平和自由連盟の創始者ジェーン・アダムズの生涯をドラマ化したV. オークレイの著作とジェーン・アダムズ生誕100周年に纏められた彼女の著作集の2書（上代の署名付き）を紹介して下さった。**新井明先生**は友の会の「聖書講座」を担当されたことより始まる会との関わりから筆を起こされ、当時の学内の動き、役職者としての立場、成瀬仁蔵著『澤山保羅—現代日本のポウロ』の翻訳・出版（総合研究所刊）など、会員との交流を織りまぜながらご執筆くださった。以上雑駁な紹介で申し訳ないが、三先生それぞれの信念に溢れる極上の論述であって、本書の意義を高めて頂いたことに感謝申し上げる。その他多くの方々の有形無形の協力を得て5月28日、友の会最終総会当日に本書を発行することが出来た。以下目次を簡略に紹介する。

巻頭 『図書館友の会 記録』によせて
上代タノ平和文庫とジェーン・アダムズ
「汝らは静まりて居るべし」—聖書講義の思い出—
図書館友の会・活動記録 / はじめに

日本女子大学名誉教授	中寫 邦
日本女子大学名誉教授	出淵敬子
日本女子大学名誉教授	新井 明

I. 「日本女子大学図書館友の会」の設立 創設者上代タノ II. 発足ならびに経過 III. 諸事業・活動内容
1. 図書購入資金の寄贈 2. 上代タノ平和文庫 3. 書籍資料その他の収集・調査・記録
a 本学卒業生の著作目録作成 b 校史資料関連の整理補助 4. 会員参加行事
a 講演会 b 講座 c 研修会・見学会 5. 会報等の発行 / おわりに
付 図書館友の会関連年表 / 図書館友の会・役員総覧

以上記述には何ら制約を設けず、各々が資料に従って担当の視点から纏めたため重複を避けられなかった部分もあるが、拙録ご高覧の節は総合的にご判断頂き、図書館友の会の歩んで来た道りにご理解いただければ一同、望外の幸せである。

(元 図書館友の会常任理事)

*本書ご入用の方は図書館にご連絡下さい。

図書館友の会が遺されたもの

堀 英理子

第6代学長上代タノ先生によって1965年に創設された図書館友の会は、図書館を後援する組織としてその充実、発展にご尽力いただいたが、2013年3月末を以って惜しまれつつ閉会された。その長きにわたる活動の主軸のひとつとして、上代タノ平和文庫に係る、上代先生が携われた女子教育活動、平和運動、文化活動に関連する図書、雑誌等、また、先生宛の書簡、パンフレット類、新聞の切り抜きに至るまでの、多種多様な資料の収集、保管があった。

数年前より、収集された多岐多様に渡る雑誌類を始めとする資料群の整理作業、管理は図書館へ委ねられ、主に参考係が中心となり、図書館所蔵資料とするべく、その選定の任に当たることとなった。途中、大まかな選別作業の中で、書簡類等はその管理を成瀬記念館へ委嘱したという経緯もある。

それらは現在図書館6階の書庫に置かれているが、年月がたてば当然ながら埃も積もれば塵も降りる。加えて窓のない部屋という環境の中、少々閉所恐怖症気味の身にとっては中々手強い作業ではある。だが、資料の山の中から思わず手に取った一冊の雑誌の、年月を経て変色した表紙の片隅に“Tano Jodai”とくっきりと力強い署名を見出す時、なぜかそこにきらきらと光がさすような気がするのである。不思議なものである。上代先生が手に取られたのだ、何かの参考にされたのだろうか、思いを巡らしながら、身の引き締まる瞬間である。

ここでは思いつくままに、いくつかの資料について書き留めておきたいと思う。

『小さな親切』という雑誌が創刊号から20年分ほど揃っていた。1963年、当時の東大総長茅誠司氏の卒業式の告辞がきっかけとなって始められた、「小さな親切」運動本部発行の雑誌である。上代先生は創立に参画され、理事として、このいわば草の根運動の原点ともいべき活動に取り組みられたのである。

図書、雑誌の中には、広く世間に流通され多くの人の目に留まるものもあれば、そうでないものもある。図書館等で所蔵され、検索、閲覧が可能なもの、図書館資料とは仕難く、それ故に容易には見つからないもの、色々である。

『不死鳥 アリス・ハーズ夫人記念平和基金ニュースレター』という小冊子があった。質素なガリ版刷の印刷物である。「アリス・ハーズ」は、アメリカ合衆国の平和運動家で、ベトナム戦争の継続に抗議して、焼身自殺した方である。その人となり、思想は、『われ炎となりて』に詳しいが、編訳をされた故芝田進午氏が同著の普及とその遺志を広めるため、「アリス・ハーズ夫人記念平和基金」運動を起こされ、その賛同者に送付したもののようである。初号（1966年6月発行）には、平塚らいてうを初めとする当時の錚々たる知識人達の名前とその推薦の言葉が掲載されている。

上代先生も一文を寄せられているが、平和運動家として生涯を通じて活動された先生のベトナム戦争への思いの一端が窺われて興味深い。

『生命の言 初期キューカー運動の研究』は、初号（1981年2月発行）に創始者ジョージ・フォックスの手紙や、初期キューカー運動を担った人々の信仰文章を紹介していくことを目的とするところがある。キューカー教徒としての上代先生とのつながりが想像される。

日常業務の傍ら、細々と作業を積み重ねて来ているが、このところ整理業務担当者の努力によりかなり捗り、先が見えてきた現状である。

これら様々な資料の居場所を定め、それを次世代へ正しく継承していくことが、現在図書館業務に携わる者の責務と考える。また、それが地道にたゆまず努力を積み重ねてこられた方達への恩に報いることなのだろう。けだし、真に受け継ぐべきは、真摯な揺るぎない情熱とそれを支えた高き志なのかも知れない。

（館員・参考係）

「日本女子大学学術情報リポジトリ」の公開に向けて

濱口 都紀

「学術リポジトリ」とは、学術機関がその産出する知的生産物を電子的に保管し、社会に発信していく仕組みのことをいう。本学でもその必要性については以前から意識されてきたものの、データベースの構築と管理、サーバの管理運営やコスト等、導入するまでにはいくつかの関門があり、なかなか実現に至らなかった。このたび国立情報学研究所が、新規にリポジトリを構築する機関を対象に、共用リポジトリのシステム環境を提供して運用を支援するというサービスを開始し、本学もこれに参加させていただくこととなった。

またこの間、学位規則の一部を改正する文部科学省令により、大学は2013年度授与分以降の博士論文や審査結果を、原則としてインターネットで公開することを義務づけられることになった。その際、「インターネットの利用による公表の具体的な方法については、(中略)機関リポジトリによる公表を原則とされたいこと」と定められており、多くの大学でリポジトリの整備が急がれる要因ともなっている。

学内外のご協力をいただき、10月1日には無事、学内を対象とする試験公開を開始することができた。アクセスの方法は下の図にお示ししたとおりである。まだ整備中のコンテンツが多いが、来年4月に予定されている本公開までに順次作業を進めていく予定である。まずは紀要の掲載について関係の方々のご相談を始めているところだが、リポジトリの意義や目的にご理解をいただき、ぜひご協力いただきたいと願っている。また、将来的にはより多くの学術情報を搭載できるような環境整備や内容の拡充が期待される。
(西生田図書館課長)

The screenshot shows the website interface for the Japan Women's University Academic Information Repository. The main header reads '日本女子大学学術情報リポジトリ' (Japan Women's University Academic Information Repository). Below the header, there is a navigation menu with options like 'HOME', '図書概要', '目次', and '学内刊行物'. The main content area features a list of items with details such as '言語', 'キーワード検索', and 'アイテムリスト'. A sidebar on the left contains a search bar and a 'リンクリスト' (Link List) section. A red box highlights the repository title, and a blue box highlights the '試験公開' (Exam Release) status. The page also includes a calendar and a 'お知らせ' (Notice) section.

平成25年度夏期スクーリング開館について

今年度の夏期スクーリング開館は8月5日(月)～31日(土)の4週間で例年同様に24日、開館時間は<月～金>8:45～19:00、<土>8:45～18:00でした。また、夏季節電対策として、空調は1階～4階のみ運転、5階は閉室とし、洋雑誌・上代タノ平和文庫資料は出納式(通覧希望の場合は入室をご案内)、ビデオ・DVDの視聴は1階AVコーナーB室へのご案内で対応致しました。ご協力いただき、ありがとうございました。

今年の利用状況は下表のとおりです。受講生数自体が減少し、図書館の利用も減少傾向ですが、土曜スクーリング等で通常期にも図書館を利用する学生が増えていることが原因のひとつとして考えられます。一方、猛暑の続いた今夏も、

夏期スクーリング開館の利用状況

年度	25	24	23
開館日数	24	24	24
入館者数	4,461	4,712	5,553
1日平均	185.9	196.4	231.4
最高	294	274	318
最低	128	146	145
受講者数	931	981	1,038
登録者数	421	459	509
1日平均	17.6	19.2	21.2
貸出冊数	1,296	1,424	1,606
1人当たり	3.1	3.1	3.2
1日平均	54	60	67
最高	134	109	111
最低	20	28	34
貸出日数	24	24	24
複写枚数	9,971	11,147	14,242
1日平均	415.5	464.5	593.5
一般学生・教職員 その他の貸出	1,374	1,260	1,599
1日平均	57.3	52.5	66.7



スクーリング登録風景

始業前に来館する熱心な受講生の姿や、昼休みの閲覧室で図書館資料を利用して学問に没頭する受講生の姿が多くありました。

今年度は『女子大通信』4月号、5月号に「学習支援：レポート・学習のための参考資料の探し方」を掲載し(10月号、11月号に再掲)、「1. 本学の図書館の来館利用について」では、来館利用のポイントをご案内しています。受講生の方には、限られた時間を有効活用し、より多くの資料に触れ、充実した時間を過ごしていただけることを願っております。(館員・閲覧係 中澤恵子)

参考係利用状況(質問処理件数)

年度(日数)	25(24)	24(24)	23(24)
一般学生・教職員	37	36	26
スクーリング生・その他	30	41	56
合計	67	77	82
1日平均	2.8	3.2	3.4

跡見学園女子大学図書館と日本女子大学図書館との相互利用協定について

日本女子大学図書館は、跡見学園女子大学図書館と相互利用協定を締結しました(2013年11月1日施行)。日本女子大学の学生・教職員は、本学発行の学生証または教職員証を提示することにより、跡見学園女子大学図書館を利用することができます。詳細は、図書館ホームページをご覧ください。

【訂正】前号(No.147) p.7最終行の「情報サービス部長」を「情報サービス課長」に、p.8<西生田>資料検索講習会「5～7月、10月」を「5～7月」に訂正します。

編集後記 今号作成中の10月28日(月)、跡見学園女子大学図書館との相互利用協定調印式が行われた。すでに協定施行済の学習院大学、お茶の水女子大学に加え、さらなる活発な相互利用が期待される。現在、図書館ではWeb版利用者アンケートを実施中である。結果は図書館HPで報告するとともに『図書館だより』にも掲載予定である。平成25年度図書館だより編集委員：中曽根緑、大沼真美、中澤恵子、鈴木学(中曽根)

日本女子大学図書館だより No.148 2013.11.15 ホームページ <http://www.lib.jwu.ac.jp/lib/LP.html>
日本女子大学図書館発行 〒112-8681 東京都文京区目白台2丁目8番1号 ☎(03)5981-3195